アーサー・ホームズ

『人格の形成～キリスト教大学におけるモラル教育』
（邦訳・その4）

A Translation of Arthur F. Holmes, Shaping Character: Moral Education in the Christian College, Part IV (pp. 58–82)

伊藤 悟
Satoru Itoh

訳者解説


アラン・ブルームの「アメリカン・マインドの終焉」（みずす書房）の指摘は、米国のみならずわが国においても、多くの大学人に少なからぬ衝撃を与えた。今日の学生気質の変化、大学（教師）の質の変化、学問世界（大学）の変化、それらはとりもなおさず文化的変質を意味し、また近代文明の行き詰まりを露呈している。大学では、モラル教育にはこれまでほとんど関心が払われてこなかった。発生した個々の事態への対応や再発防止のための方策は講じてきただが、日常的なモラル教育は骨無に等しい。しかし、もはやモラル教育は教養教育の柱、無、高等教育における最重要理念の一つとして考えなければならない。本書が指摘するように、そのかたちは有形無形、つまりカリキュラム化されたものと潜在カリキュラム化（hidden curriculum）されたものがあるが、いずれにせよ大学人意識のなかにモラル教育の座が間違えられなければならない。

とくにキリスト教大学はそうした使命を一身に負っている学校と言えよう。ブルームをはじめ、高等教育における教養教育の重要性をうたう人々は多く現れているが、キリスト教大学に関わるわれわれにとっては、ホームズが指摘するごとくに、「キリスト教大学におけるモラル教育の使命」を改めて確認する必要がある。ここには明白な聖職の基礎づけ、すなわち基盤としての聖職の人間理解が要求されるが、大学としての信仰的・神学的な姿勢が問われる。またそのための意識の向上や教育養成も大きな課題とされる。

とうくに倫理的再建なしに大学の再生はない。わが国ではこの危機意識はまだ描めて低い。個人主義が語られる時代にあって、今後大学はどこまで社会秩序を整える文化創造的使命を担っていくことができるのだろうか。わが国においても、大学とりわけキリスト教大学の社会的存在意義がいま改めて問われ始めている。

キーワード：決断、責任的主体、英徳、道徳的アイデンティティ、裏づけテキスト、値観観の領域
第5章 人格の成長

聖書における義の概念は、良心を形成したり分別ある判断力について学ぶ以上の広がりをもっている。義は単に正しい行動をとるかどうかだけではなく心の内部問題であり、それは、私が何に価値を感じるかどのように行動をするか、そして私自身が自己存在の根拠をどこにおくような人間なのかという問い合わせである。聖書はこのことを多様な仕方で述べようとしている。イエスは「心の清い人々」（マタイ5:8）を祝福した。純粹な人々、平凡な人々、または全てである。ヤコブは、「心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人」（ヤコブ1:8）について忠告しながらこのことを繰り返し述べている。またバウロは、われわれに「かえって自分のことを無にし僕の身分になり、…死に至るまで従順でした」という教訓の中で従順として的理像としてのキリストを思い起こさせた上で（フィリピ2:5-5），彼独自の例えを用いながら、目標を目指して貢献するために自己をつづけることに言及している（3:4-17）。これらはいずれも堅固で揺らぐことのない人格について強調するものである。

人格 character の語源を通じると、それはあらゆる目的のために何かを割り取ったり刻み込んだりすることであり、それがどういったものであるかを理解されないためのしるしだのそれは、それは道徳的人格と一体である。日々の生活で何か起きようとも維持されていくものである。決してそれは、状況に応じた行動でも、まるで到達されない高い目標の集合体でもなく、私が堅実な自己であるための心の事態と言える。道徳的な意味で、ひざが弱くて自分の足で立つことができない人々を、われわれは弱者と呼んでいる。また、外なる人は明るいが、内なる人は嫉妬、しあみ、自己中心性、プライドで充ちていることを、われわれは偽善と呼んでいる。さらに、好意的なことを考えていてもそれを継続できないことを、われわれは無責任と呼ぶ。それらに対して、「忠実な人」、いつものことにも堅実な人、内なる人と外なる人が一致している人のことを、われわれはモラルの確立している人格者として見る。だが人格は一晩で成長するわけではない。人格は注意深く丁寧に鍛えなければならない。これが先に述べたグループIIのことである。

啓蒙主義以降の倫理は、道徳のある行動のパターンに当てはめて粉砕するという仕方で、じつに実証と断絶に強調点がおかれてきた。同様に、罪はある特殊な考えや行動の現れとして一般化され、徹底化されてきた。罪や義は、典型的な学生たちにとって、道徳性の問題や心の深層状態というより、もしこ、やって常いことと悪いことといった特定の行動を指すものとして考えられている。

近年、美德の倫理が新しく注目され始め、美徳の倫理は、確かに啓蒙主義が強調した実証的検証を越えるかたちで動いているものの、いまだ一人の人間の道徳性の相互関連に目を向けるのではなく、個別に分離された美徳に焦点を当てる傾向をもっている。美徳も悪徳も、ある人間の人格やその人間が何者であるかを指し示す構成要素として共存し、互いに絡み合っている一つのかたまりである。心のあるところにその人自身がある。イエスの言うように、思いやりは心の内から湧き出ってくるのであり、それらは口からもあふれ出てくる。モラル教育は、ただ単に合理的判断や適正行動についてではなく、キリストのような道徳性への心を磨いていくという、そうした心の習慣について語っていく必要がある。

最近あるクーキー派の友人が、すべてについて内面的生を強調するのはあらゆる危険を伴なうと、指摘してくれた。それは、つまり個人の道徳性の強調は社会的関心から目を逸らすのび
う危険性があるということである。個人的美德を高揚させるは公的正義には目を向けられないでいる多くの経済界の人々や政治家たちがよい例である。彼らは内側は信心深くても、外側は世俗化しており、もちろんその対反も起こり得るのであって、内面的に一致することもせずに形式的な行動を供することだけを期待するキリスト教共同体があったりする。これもまた仮善である。

もっとも、キリスト教倫理は二つの危険を回避するためにある。すなわち、本当に有徳な人格が確かな行動を取っていくときの私的所与と仮善の問題である。そして絶対なキリスト者の人格は、私のもとに虚偽に神に従従していくことによって正義と慈愛を求めることによって、私的な要素を通して、とりわけ教室での講義よりも個人の人間関係や所属する共同体によって影響を受けるものである。人格の成長を考えていく上で、われわれはそれらを幅広い視野で捉えていかなければならない。

責任主体

ここまでは、グループⅠならびにグループⅡについて見てきた。グループⅠは、正しい価値観、すなわちわれわれが欲し追求すべき善を帰結と、それによって責任的な行いや行動が導かれることをのために良心の知識になることについてである。また、グループⅡは、道徳的視点を身につけ、基礎原理に基づいた判断を導くためのイマジネーションの必要性であった。ひとたび原理原則にもとづいた判断、つまり責任的な思考方法や行動が習慣化してくると、何らかの内面的な変化が生じていくようになる。人は人格を成長させながら、責任主体となっていくのであろう。

人格と行動の関係には密接かかかわりがある。「人格」というのは、単なる行為者というよりも、もむしろ行為の主体としての人間を指し示す言
業である。行為と行動様式はその人の人格を極めてよく反映するが、必ずしもそうでない場合もある。それらは、まるで受け入れがたい行動や感覚を隠そうとするために社会的に認識された仮面を被るようにして、偽善を「着込んで」いることもある。あるいは、内面の信念なしに社会化され、われわれの中に傾斜してしまうこともある。しかし、責任的な人間とは、自分の行動を自覚して、慎重かつ自由にとらえていく習慣をもつ者、また自分の言動に意味をもたせる者のことである。内面実存は外的実態と相反する。そこには一貫性と完全性が現われる。

20世紀初頭の道徳教育は、社会的に受け入れられる行動かどうかを道徳的基準とし、したがってそれを推進する行動主義の路線をたどってきた。キリスト教社会における行動様式はしばしば人格の形成よりもこうした方向性に流されるものであった。温情主義的であったり保守的であることが普通的に強調されたり、個人的な責任よりも法的後退が重視されるようなときには、とくにそうであった。にもかかわらず習慣的な行動は道徳的気質を育て、その気質こそが道徳とていくのである。

このことを考察するために、古典的文献の中からアリストテレスに注目してみたい。彼は、子どもの道徳的訓練に際して、習慣的なことを反復して教えるのが大切であると、そして幼少期の習慣の形成は親や教師たちの責任であることを指摘している。道徳は教養も共に教師なのである。しかし、子どもが成長してくると、この方法は通用しなくなる。われわれが知っているように、思春期の青年たちは他人からものと言われるのを嫌がる傾向をもち、彼らは独立した自己へと成長する中で、権威の限界を乗り返し試すことをしていく。パウロはわれわれすべてが何らかのかたちで青年期に経験する事柄を、そうした罪への欲情は「律法によって働く」とであり、あらゆる種類の欲情となって現れ出してくれると言っている（ローマ7：5－8）。道徳的な権威は重要である。ウエストミンスター信仰問答においては、神の道徳法の三つの機能についてみごとに述べる。すなわち、われわれの罪を明らかにすること、われわれをキリストへと導くこと、そして、生活の規範を整えることである。しかし、すべてのキリスト者が知るべきことは、たとえ神の法と言えども、道徳的権威というのはただ命ずることしかできないということである。たとえ人格をつくり上げるためにあっても強要するわけにはいかない。

アリストテレスの指摘は、行動の習慣は、もし子どもが道徳性に影響を及ぼすものなら、「選択する」ことを通して成熟していくべきであり、選択したものはそれが習慣化されるまで反復されるべきで、そうしなければ何の変化も起こらない、ということであった。つまり、責任主体とは、心の習慣の基盤が堅固であって、美德の高揚を求める人のことである。これは決して容易なプロセスではない。むしろ自己訓練と感情の自己抑制が必要であって、ある人々は他の人々よりもそうした道徳的な成長を故意に妨げようとする弱い傾面をもっている。

こうした類の道徳的成長は何をもたらすのだろう。基本的に良心を形成する手助けをし、善き決断のためのスキルを身に付けていく教育は必要である。価値観を整えることによって自己理解を高めることは、われわれの成長に不可欠なこととして自覚されなければならない。基礎が構築された道徳的思考の習慣は、同時に自己行動へと結びつくようになる。そうしてわれわれは、自らの目標、すなわち個人的成長のための現実的な目標を定めるようになり、それらの目標を達成するために習慣や人間関係を培っていくのである。

深く熟考せずに高い理想を掲げるのは容易なことである。熟考なき邪恶者は、彼の悪ぶきげ
アーサー・ホームズ『人格の形成〜キリスト教大学におけるモラル教育』

が原因となる事態に対しても、「そんなつもりじゃないかった」と考え、ある人々は、きわめて不適切な方法で「うっぺんを晴らす」ことになる。これは無責任であり方である。自らの責任を認めず、この自己意図したことを弁明するだけではなく、何故何者かを明らかにすることをいえよう。それはすなわち、無

観察慎重に行動することであり、偶然もなけ

れば、衝動的なものでもなく、また他者からの

圧力によるものでもない。自分の責任を受け入れることが、人生のあらゆる領域において習慣

的なものにならないならばならない。学校の宿題

に取り組むことで良心の完成を目指すのをせよ、

人間関係を築いたり、自分に与えられた役回り

を演じせよ。

また、責任のあるというのは、一人で生き

ているということではなく、他者への責任を負う

ことである。学内組織や学生サービスの企画

も人格形成のためのひとつのサポートのあり方

である。意識を高めたり錐敏になることがまず

大事だとしても、他者を援助するという目的意

識や計画性をもって慎重に行動していく習慣の

ためには、やはり責任ある行動が必要である。

学生というのは、一般にアイディアに欠けてお

り、奉仕的精神も高くはない。彼らが必要なのは、問題や社会的な脈絡をより深く理解するこ

とであり、選択、企画、実行、手段、評価のためのガ

イダンスを提供することである。

責任のない行動とは、単に何かを行うだけではなく、何を行うにしても、責任的に選択し、責任的に計画を立て、

責任の関係なく、それを責任的に展開し、そしてそれがどうしたらよろしくなるかを学んでい

くことである。また責任をまったということであり、評価を期待することである。

そこで、価値観と美德の関係を考えることにしよう。第三章では、価値観を、われわれ

が追求すべき善き末として求めた。正し

い貢献となるところのあらゆる形の社会参加

は、責任について教える教養を整えることにな

ろう。

責任というのは、他者に仕えることの意義深

さという点で社会的にも重要であるが、人間を

して人格を成長させることにも大切である。責任

ある行動のためには慎重になっていく習慣は、

かえってアリストテレスが言ったように、人々

の心の気質を高めるものである。すなわち彼の言

うところの美德を成長させていくのである。

美徳

美徳、それはガラテヤ書5章で語られている

「霊の実」と同じように、人格の一部をなすも

のであり、丹念に培うべきものである。美徳は、

一つの道徳的に安定したかたちとして、ある欲

求、すなわちわれわれが目指すべき目標に向か

おうとする性質をもつ。したがって、それは非

常に強い感情的な要素をもっている。ジョナ

サン・エドワードは、そうした欲求を「性向 affec-

tion」と名づけて、宗教的性向の本質とその影

響力について非常に幅広く論じている。スタン

リー・ハワーハスといった近年の学問家たちは、

今日はの「欲求」が快楽や自分の「好み」に左右

され、物事を選択することにだけ多く努力が

はらわれていることを指摘している。つまり彼

らは一様に情緒的な次元が強調されていることを

承認するのである。美徳への習慣は、目的を

定めて、それに向かって慎重な手段の選択をして

いくのであるから、合理的な側面をもってい

る。しかし、それ自体による合理的な慎重さは、

物事に当たる力にはなり得ない。思慮深く行動

しようとする欲求は、ある選択や行動を繰り返

しとすることへとつながり、そうしてモラル気質

は高められていく。

ここで、価値観と美德の関係を考えてみることにしよう。第三章では、価値観を、われわれ

が追求すべき善き末として求めた。正し

- 93 -
い価値観は、目的を設定するための理想であり、われわれが認知しようとしまいと善い結果を導こうとする。美徳は、しっかりと正しい価値観へ気持ちを向けたり、それに渴望するための心の習慣のないことである。したがって、問題は、美徳の発達のためにどのようなことがなされるべきか、善い選択を遂行するする習慣をどうしたら身に付けることができるか、どうしたら正しい欲が現き出るようになるか、ということである。いったいどのような心の習慣が必要なのでだろう。

これは、学内外における大学生活全体の教育の在り方やカリキュラムの問題を遠かに超える課題である。「越える」とたわしが言うのは、もしわたしが提起するように、価値観と美徳が密接に関わっているとなら、学生たちの価値観を無視するような教師たち、学生たちの人格に責任を負う者として、重大な間違いない犯していることになる。価値観とは目的であり、美徳は、少なくとも多くの場合、善い結果に至るための積極的な性質のことである。価値観が影響を受けたところでは、美徳もまた影響を受ける。だから教師は、学生たちに目的と実感をもって課題に取り組む習慣をつけさせたり、行動を伴った決断の仕方を教授したり、あるいは、そうした美徳に関わりのある事柄を率先して模範を示したりしながら、正しい性格形成を応援していくのである。

美徳の倫理は、学生たちにある特定の美徳について、それがどのように態度や行動、それに伴なう感情や心理状況中に現れ出てくるかを深めさせることを通じて生じるのであって、われわれは、そのための援助を怠るべきではない。自己理解というのは、かつて無視された考えや経験が必要となり、個人的な目標が定まったり、慣習を意図的に発達させることが基本的要素となったりしたあとで、それに引き続いて起こってくる。自己理解こそが、人が適切な発展をなすなかで大きな違いを形成していくのである。

カウンセリングのクラスであっても、それ以外のどんなクラスであっても、目的設定というの重要である。もしそれがうまくいかれるなら、その授業は十分に課題への取り組みをすることはできない。どういった美徳を育む必要があるのか。忍耐、自己練磨、どのような態度や行動でそれを示すとするのか。どんな状況がそうした態度や行動を引き起こすのか。すなわち、その状況の中で私は内面的、外面的にどのように行動をとるのか、そして正しい習慣を身につけるために私は何をしたらよいか、といった予測を当ててみることが必要である。

しかし、美徳を育していく責任は、価値観を伝達するのと同じように、個人や教室の枠を越えて、大学共同体全体にまで、またそれ以上にまで及ぶものである。スタンリー・ハワースは、共同体の役割やその物語を演じることの重大さについて語っている。共同体の物語の中で自分の居場所を探すことによって、私はそれを自分の物語にし、その共同体を自分の共同体とする。その物語は、日々、私の物語のなかで、また私のする選択、私の目指す目標、私が形成する慣習のなかで、解き明かされていく。すなわち、その物語は、目標と意味、選択と習慣そのもののであって、私の物語の中でその意味を明らかにしながら、その目的を自らのものとし、その求めるところを自らの求めるところとしていくのである。

共同体の構成員は、その共同体特有の物語を保持している。旧約のイスラエルの民は、繰り返し神が何をなしたかを想起し、彼らの祭りはその物語を祝うものであった。スコットランドのカヴェナー（17世紀スコットランドで长老主義維持のために誓約を結んだ人々のこと、訳者）も再洗礼派のグループも同様に彼らの物語を保持してき、今でもこれらの共同体で
は、ある特別な性格をつくり上げている。例を挙げれば限りなくある。

キリスト教共同体は、福音の物語と神のこの世における願いの行為の大きな歴史という独自の物語をもっている。それは、まず神の国と神の義を求めるべきだとする物語である。それでも第一に求めることを選択すると、それは私があるうる事柄の選択をする上での一つの習慣となっていく。

しかし、共同体が祝う必要儀礼や儀式のことも考えてみよう。信仰するというのは決定的なことである。誠実な悔い改めと回心は、目的や欲するものが変わられ、心や魂が一方から他方へと移り変わるすることである。成人回心者の洗礼式は、霊的に聖められ、信仰者として信仰共同体に加えられっていくことを象徴するもので、洗礼式はキリストにある新しい生活方を祝うものである。結婚式もまたイニシエーションの儀式であり、記念日はこれを祝う。外国人が帰化するときには、その責任と特権において新しい市民となるための契約の儀式が重視される。これらの例から分かるように、入信儀式や祝祭というのは、新しい共同体の構成員としての忠誠を誓うことである。大学も、共通の理念と共に参与して、思慮深い選択の習慣を追及しようとして、年頭に毎年同様の儀式を行って新入生を迎え入れるのである。

だが、イニシエーションだけでは十分とは言えない。結婚に向けての強い意志を今日もやっていても、それは明日にはいと簡単に厄介なものになることもあるし、共に生きるという習慣がほとんどないのに、新しい回心者がイニシエーションのときからあまりに多くを期待されるのでは、彼らは途方にくれてしまうだろう。共同体の構成員は、その責任を、心や魂の成長が訓練されるなかで、実践を通じながら学んでいかなければならない。キリスト教の共同体には、歴史的にもまた今日も、キリストの弟子と

してのよき証しをしている人々が数多くいる。もしわれわれが、そうだ証し人の重要性を認めななら、学生たちに必要な美德とそれらの美德が要求する修養的習慣の両者を具体化する生き証人が学内にいることが求められるであろう。

共同体においては、友情もまた重要である。われわれが教会で「交わり」と呼んでいるものは、共に過ごすことによって気を休めることができ、われわれの生活を豊かにさせるものである。旧約聖書の箴言や、友情は道徳的発達に関係があると述べている。またアリストテレスも、友情はきわめて重要なものだとして注目して、あらゆる類の友情について詳細に語っている。われわれは今日、友情をそれほど大きなこととして考えていない。よき友人関係は、自己中心性を打ち砕き、仕えること、共感すること、他者のニーズに気を配る習慣を身につけさせてくれる。また、他者の知識や経験、あるいは道徳的発達が共通を目指すもの、必要とされる習慣を培う上での情緒的支援、自らを刺激し自己を変革しようとする意識などにも影響を及ぼす。このような友情によって欠くことのできない物事が、眠眠をきたいせい価値観、すなわち互いに習慣的なものを形成していく上で必要な善き目標を保持することになる。友人の価値観は、自分の価値観と共に重要なものである。

私が述べてきた、共同体がどのように美德を発達させていくかのほとんどは、聖書に基づいている。聖書は、われわれが、信仰生活、信仰者像、交わり、そして積み重ねてきた知恵を通して、神が何を成し遂げられた、何か成しておられるのか、共に入たい想を醸せようとする物語である。聖書がそれらを指し示すことによって道徳的生に影響を及ぼすとするなら、その影響はより命令的なものとなる。そうした命令とその神学、そしてキリストの人格と生涯について
のすべての信仰的描写が、直接的なインパクトを与えていくのである。使徒が言うように、聖書はそれ自体が、われわれの思考や「意志」のなかに美徳の座を作り出して、鍛錬に導くものであり、神が求められる場面がある。誰がそれを追求するものである。

にもかかわらず、われわれは人間の堕落の厳しい現実には目を閉じようとする。アリストテレスは、意志の弱さが賢い判断を封じ込め、善き習慣を害し、人格に悪しき影響を及ぼすことを見つけしていた。キリストも、それがより致命的な墮落であることを知っている。それでも、人は、キリスト教信仰やキリスト教との出会いを経験しない者も含めて、神の御手のなかで美徳を発達させていく。道徳心理学も指すところであって重要なものとし、機能を続けている。アティナスは、正義、慎重さ、勇気、節制といったこの世で他者と共に生きていくための基本的な美徳を可能にするのは自然の成りゆくだと述べた。だが、神と共に生きていくとき、信仰や希望や愛といった美徳は神の恵みに依存している。われわれは、それを顕著に分かれるかどうかは別にして、人々の中で広く美徳の形成を可能にする共通した神の恵みと、信仰者の上にだけ働く特別な神の恵みの両者が働いていることを認めるを得ない。すべて善なるものは上からもたらされるのである。

美徳はどんなときにも必要ではない。自己訓練はいつも成功するわけではない、あるいは悪しき習慣を打ち破るのは極めて困難だと考えるのは、人間の罪深い現実に他ならない。だからこそ、キリスト教のコンテキストにおいては、道徳的発達は霊的な発達と手を携えていかなければならない。霊的発達とは、すなわち神学者たちの言うところの霊化であり、聖書が人を罪の絆目から解放し、神の満たしたいものへの渇きを満たすという意味の手段である。しかしそそれは、信仰的発達と道徳的発達が理論的に連携しながら、われわれは両者を追求する訓練をしていかなければならない。道徳的な生き方を拒絶したり、信仰者の社会的責任を無視したり、教会の活動に責任に関わることから遠ざかったり、あるいは個人主義が大きく歪められたりするところでは、霊的生活は倫理的にも霊的にも限られた効果しかもたらさないことを強調しておきたい。自らの内面的な感覚や経験にだけ集中したり、「世俗」から宗教的なものを隔絶するといった個人主義化された霊性は、無駄なものと言えよう。それら的霊性がきわめて重要である。キリストの主権を生活のあらゆる場面で習慣的に実践していくこと、それによって、個人的にも社会的にも、義への飢えや渇きが飽くことを知らないものとなっていくのである。

道德的アイデンティティ

アラーン・ブルームは著書『アメリカン・マイドの終焉』(The Closing of the American Mind)のなかで、学生たちがアイデンティティ、すなわち道徳的あり方の見通しを保障する確固とした統合的核を失っていることを指摘している。この問題は、学生たちの相対主義化の問題であり、ブルームは、人類の共通の遺産としてのリベラル・アーツの伝統に立ち返るべきだと主張している。それこそが今日、アイデンティティを取り戻すための助けになると言うのである。

リベラル・アーツだけが人々のアイデンティティを呼び覚まして神の道を形づくり、神との関係の中で生きるようにさせるのだろうかと問われたとしても、われわれは、リベラル・アーツの伝統の重要性に何ら異論をとさむつもりはない。個人のアイデンティティの問題は、完璧には、心理学的、道徳的、そして霊的なものであり、決して単なる「文化的」教養や「文化的」アイデンティティではない。
アーサー・ホームズ『人格の形成〜キリスト教大学におけるモラル教育』

アーサー・チャッカリングの「教育とアイデンティティ」（Education and Identity）は、教育者たちの間では、こうした問題は二十年前からあったことを指摘している。彼によれば、予見的な言動は他の人の目的意識と一致し、内在的な平等性や連続性は他者への平等性や連続性と整合するという依頼関係によってアイデンティティが確立していくという。そうしたアイデンティティが成立しているところでは、自由への感覚が人間相互の関係をかたちづくり、関心と目的を深めていく。アイデンティティとは、価値観の一致化、完成、統合のことであり、それぞれの価値観が有効に用いられることによって一贯したパターンと言動の一致を導いて、内面的な強さをもたらしていくのである。したがって、個人的アイデンティティは、道徳的アイデンティティという大きなものさしのなかで測られるのであり、道徳的アイデンティティが欠如したところでは、道徳性のみならず個人の成長も抑制されることになる。

われわれが関心を向けているのは、とりわけ「道徳的」アイデンティティである。しかし同時に、道徳的アイデンティティが欠如したところでは、価値観はまるで秩順を失い、そして結局、美徳も危機に瀕することを忘れてはならない。無秩序的な価値観の羅列は、すべての方向性を一気に引きずり込む。また孤立化した美徳は、もともと、不完全のこととき残存したり、ときには歪められたことがある。サディスティックなギャングたちは、自分の子どもたちを爱していると言うかもしれないが、必ずしも一人の人間として愛しているかどうか分からない。道徳的特性というのは調和の取れた気質を並べ挙げることではなく、すべてにおいて堅固に道徳的アイデンティティを追求することである。したがって、人格の成長とは人が人生におけるあらゆる関係のなかで責任的な行動をとることのできる、冷静な、見通しの持てる人間を形成することだった。プラトンの提起以来、美徳の一致は倫理学者たちの関心的となっているのである。

個人のアイデンティティに関する二つの異なる哲学的伝統は、道徳的アイデンティティの成長を理解する上での助けになるだろう。一つは、ジョン・ロックから今日にいたるまでの経験主義者たちが、パーソナリティの形成を経験に根拠をおこうとして、つまるところ人格形成はその人の記憶の連続性のなかに依存するものとして捉えるという考え方である。そうした説明は、私がたとえ私自身の孤独さの中に自己のアイデンティティを発見するかのように、まったく個人主義的なものである。しかしもう一方、ヘーゲルからマルティン・ヒーバー、ジョン・マックスウェイ、その他の現代学の思想家たちは、個人のアイデンティティは他者との関係の中で浮かび上がってくるものとして、その社会的本質を強調する。私自身もまた、夫、父親、地域住民、教師、友人といった様々な自己を見出すことができる。

確かにキリスト教の理解では、個人というものを関係性の中に見出すとする。もしわれわれが神との関わり、そして他の人々やわれわれの属する物質的世界との関わりの中で生きることとして創造されたのならば、個人というもの関係性の中に見出そうとするのはキリスト教的理理解にとって当然のこととなる。このことは、記憶というものが関係を経験する中で作り出される以上、記憶理論においても同様のことが言えるだろう。ハーワースが強調するところの「物語」は、記憶の中に訴えかけるものであり、彼の強調する共同体とその物語は、共同体の記憶の中に訴えかけていく。その結果が神秘的、哲学者的、心理学的にしっかりと基づけられた個人のアイデンティティとしてあらわれてくるのである。そして、人間関係は継続される記憶はさらに長く留まるものである以上、個人のア
イデンティティはそれらと共に成長を続け、同時に道徳的アイデンティティもその人格の主要な要素となっていくのである。

このように、道徳的アイデンティティがその重要性を振り返ってみることは、生い立ちや歴史的・文学的素地を通じて、またそれらの美徳や悪徳によって、あるいは、表出したり欠陥があるにせよ、ある意味で一贯したアイデンティティや、彼らの性格を支配している愛を通して、自然に引き起こされていくものである。文学を学ぶことの一つの大きな意義は、文学は人間そのものを引き出し、それを写し出すものであり、それによってより完全でより真実な自己認識にいたるべき者になっていくという点にある。まったく同じように、聖書文学の一つの意義は、美徳や悪徳にまみれている聖書の登場人物たちの現実描写にある。使徒の言うように、彼らの行動はまるで鏡のようであり、われわれは、そこにわれわれ自身を見、神の恵みによってかつてとは異なる姿に変えられようとする決意へと導かれていく。歴史的・文学的素地が道徳的アイデンティティに直接関わるのなら、われわれは、キリストの人格その地上での生涯を熟考するという仕方でキリスト教の教義の深さをさらにに目を留めることになるだろう。まったく神にしてまったく人であるイエスは他に類を見ない規範であったし、イエスの道徳的アイデンティティは、家族や父なる神との関係における宗教的共同体に基づかれるものであった。彼のような人格がわれわれのゴールである。

しかし、どのような関係が、美徳を道徳的アイデンティティのかたちの中に結びつけることになるのであろう。そもそも美徳が善を目指そうとする性質をもっている以上、美徳は人を最高値へと導き、その結末は安らぎをもたらすものとなる。そして、最終の結末、すなわちすべてのものに価値を与える最高善が神である以上、神が統合した美徳としての愛はそれに続いて生起することになる。アウグスチヌスもアクティナスも共に、われわれはわれわれの愛するものによって支配されるという統合的な美徳として愛を取り上げている。アウグスチヌスは、節制とは神に対して自らを腐敗させないための愛のことであり、正義とは神に仕えるための愛、すなわちすべてを秩序で定める仕方での愛であることを論じている[20]。同じことは他の美徳についても言えよう。神への愛は、すべてを神の御旨に従って方向づけるようとする。その意味で、愛は教義を高めるうえでのもっとも高貴な中心的な美徳であり、キリスト者の道徳的アイデンティティは、神との関係の中で研ぎ澄まれていくのである。アウグスチヌスの『告白』は、彼の回心のかたちとして、彼が自らをつくり替え、自己を統合させるために丁寧に行った自叙伝的作業である。

そうしてわれわれは、もっとも高貴な善は神に献げられる生と魂であるという慣例親しんだテーマに立ち返っていくことになる。学問と信仰の統合を試みる倫理を教え合う場合には、信仰的・聖的成長が必要となっている。モラル教育とは、倫理のモデルを、神への愛のモデルと結合させることである。コーネル大学でかつて学長を務めたイエズス会のフレンス・ロッテスは、次のように述べたことがある。教師が自分の教師としての役割を具体的な形で何よりも優先するなら、それは学生たちの道徳生活、学問成果、信仰生活に大きな影響を与えるに違いない、と[21]。

神への愛を養育するにあたっては、心からの礼拝を献げる習慣がその中心になければならない。共同体が製美、説話、信仰告白、聖書読書、説教を通して語ることからは、すべての神の義と道徳的人格について物語る方法である。それらは、人間の道徳的責任の基礎として神が何をしてくださったのかという究極的アピールをする
共同体の道徳論のための言語である。礼拝によって、われわれは神の民としての自己を確認する。縄縄してわれわれの良心をかたちづくり、行動を整え、性格をはっきりさせるという点において、礼拝は一つのアイデンティティを確立させているのである^{8}。

一般的には、霊的成長や個人的成長といった人格の陶冶は、じつに生涯にわたる出来事である。しかし学生時代というのは、人生の中でもとりわけ最高の形成期であり、そこで浮かび上がってくる道徳的アイデンティティはその後どのように成長するかという方向性を決定づける手かかりとなる。もちろんその後も変化は起こり得る。それはよい方向にではなく、ときには悪い方向へ変化する場合もある。しかし、大学生は、目標を示したり方向性を定めることができるはずであるし、築かれた友情関係を進行させたり、母校への忠誠を持続させることによって、またあらゆる分野で卒業生に影響を及ぼし続ける手本となる人々によって、未来へのかけ橋を築いていくことはできる。卒業式などの共同体の節目になるような式典は、善徳を高めてより責任が増し、心と魂を引き立てして神を愛するようになっていくための人生における新しい段階の始まりとして意識されるべきである。このようにして、キリスト者としての誠実な道徳的アイデンティティは、生涯にわたって堅固なものとなっていくのである。

第六章 聖書と倫理——まとめとして

最後に、これまで論じてきたことがらを振り返りながら、われわれの考える道徳的成長にとって、聖書が重要役割を果たすことを明らかにしておきたい。それはたんに、聖書が広く公開されているからというのではない、われわれの目指していることが、より多角的なことであり、多くの諸問題が複雑に絡んでおり、また聖書的見解そのものも従来がしばしば考えているよりも遥かに多彩だからである。道徳教育は、ただ単に聖書の語るところを力説していればよいのではなく、また裏づけとなる聖書箇所を引用して説明づけをすればよいのでもない。道徳教育は、複雑に絡み合ったり紛紜している状態をも含めることであり、われわれは、その真中で聖書テキストと共に、心理学や哲学や神学の助けを得ていくのである。

1. しばしば見られるような、主張を明確にしようとするあまりに、ある聖書箇所を文脈脈脈につき取り出したりはそれに分解して引用したりするような裏づけテキスト化は、好ましくないあり方とは言えない。裏づけは正しいことか間違ったことかという単純で明解な問いに対しでは、すぐさま十戒から引用すればことは足りるかもしれない。しかし、質問者が、神が「今なお、この時代にも」裏づけを容認しているのはなぜか、あるいは、他に裏づけを禁じている箇所はどこにあるかを知りたいなら、十戒だけでは不十分だということになる。さらに、もし誰かが、例えば旧約聖書のヨハネのようにに多変に生きる信仰者は、裏づけの罪に問われるべきかどうかという裏づけに関する定めの細部まで尋ねてきた場合には、裏づけテキストというだけでは、それほど役に立ちはない。

われわれには、無関係な裏づけテキストを引き合いに出すよりも、もっと具体的で統一されえた文脈、つまり、ある主題をめぐっての聖書全体が作り出している一つの物語が必要である。こうした回帰は、性や結婚に関して、聖書的見解全体を幅広い視野で、また、聖書の人間観とのつながりの中で保持されていかなければならない。テキストを広く文脈で注意深く考察していくと、われわれは、特別な箇所の具体的な場面やその箇所の歴史的背景だけに目を向けて
伊藤 悟

2. しばしば人々が陥るもう一つの危険は、聖書は起こりうるあらゆる倫理的課題に対して何らかの具体的言及を必ずしているはずだとの思い込みである。これは明らかに問題外である。聖書は確かに、いつの時代でもどんな文化であろうと、どんな人々であろうと適用する、幅広い「価値の領域」（仕事、結婚、あるいは人生の価値のような）について語っている。だからこそ、重要な背景となる信念が整えられていくのである。しかし、近代の科学技術や現代社会は、例えば遺伝子の研究、生物戦、原子力廃棄物のような聖書記録たちが想像だにしなかった倫理的課題を突きつけてきている。信仰者にとって聖書は最終的な権威であり指針であることに疑いない。しかし、それが徹底されているとは言い切れない。聖書の示す大きな原理はつねに適切なものであるが、これまでの章で指摘してきたように他の人々による他の視点もまた手がかりとなる。

聖書は、聖書だけれども倫理的解釈を深めるための唯一の方法にしようとは思っていない。倫理的出来事における一般啓示もまたあり得る。ローマ教の冒頭でパウロは、すべての者は責任を負っているという当たり前のことを考えておらず、倫理法は十分すぎるくらい身近なところにあると明言しているし、まとは言の無き伝統であることを伝える。したがって、もしわれわれが、聖書を最終的な倫理の原典として尊ばなければ、われわれは他の倫理的解釈についても、それらがどれほど価値あるかを同じように検証することになるだろう。われわれは、他の倫理の諸原理がキリスト者の倫理に関する議論に貢献することもあり得ると考えているし、倫理に関する自然法にはとくに耳を傾けようとする。

仮に、聖書を裏づけテキストとして利用するのは好ましくなかったり、聖書はあらゆる倫理的テーマを余すところなく網羅しているのでは
アーサー・ホームズ「人格の形成～キリスト教大学におけるモラル教育」

いとくらしても、聖書は人間の価値観のあらゆる一般的な領域に関わるものであり、あらゆる領域の中で混在されている道德原理の全体像を明らかにし、古代から教義的な実例や方法であったのは事実である。倫理教育で取り扱い得るいくつかのテーマを考え出してみると...

世界の歴史と自分史
神の性質に関する見解
神の救済の業とその目的
様々な日常性における神学的視点
イエス・キリストの生涯
数々の物語と記録された出来事
人間社会と人間行動への道徳的警告
格言化された道徳的知恵
神の民の生とその特徴
人生の戒めとルール

挙げようと思えば枚挙にいとまがない。ルイス・スメドレによるルールの四類型は、すべての道徳的ルールについてではないが、参考になるものである。

① 義や愛といった完全なる例外なき道徳ルール。第4章ではこれを「総括的原理」と称した。
② 特定の分野領域に関するもので、例外のほとんどないルール。
③ バウロが実践に挙げられた物を食べるることについて述べたように、状況に応じて変化する戦略的ルール。
④ 女性がかぶり物をするかどうかといった、道徳的というよりもむしろある文化の中で重要とされ、文化によって変容するルール。

3. ひとつひとつの聖書の洞察を考察していくと、われわれが道徳教育について議論するなかで見えてきたように、聖書の影響はあらゆる科目に及んでいることを真剣に受け止めざるを得ない。聖書は目標を定める手助けをし、また次の三つの段階すべてに向け語るもので、すなわち、良心を形成すること、賢い決断をすること、道徳的人格を身につけことである。

「良心を形成する」とは、つまり聖書の登場人物の生やその歴史的出来事の写実物語は、それを読む人々の非広い問題意識をつけるさせ、複雑な価値の構造に敏感になることを得させることである。旧約の預言者たちは彼らの時代の不義を暴いたとき、彼らは、要するに、価値観の検証と価値観の批評に心血を注いだ。

山の説教（富に仕える者や砂の上に家を建てた者など）もバウロ書簡のある部分（例えば、コリントの信徒たちを彼が咎めた出来事）についても同じことが言える。また、旧約の知恵文学、とりわけ箴言やコーレンの言葉は、一貫して価値観について述べている。これらが何世紀にもわたってキリスト者の良心を形成してきたのである。

繰り返しになるが、われわれが「決断」に必要なことは何かを考えるときに、聖書の果たす役割は無限に広がっている。われわれが自分の中の異常関心から一歩言えば、道徳的視点を持つためには、先述したように、イメージーションが必要である。まさにそこが、聖書がわれわれに手を貸してくれる部分である。

聖書は、現実的な場面から少しだけ離れた外にあって、別の角度から語りかけてくる。預言者などは、「だから主は言われること」と、聖書の言葉や聖書の視点にどこか異質してきた人々にとっては、道徳的な視点は比較的容易に受け入れられる。そして聖書は、あらゆる優れた文学と同様に、登場する人々と彼らの決断のリアリズムを通してイメージーションを補給し、結果へと導いてくれるのである。

道徳的な論議は、聖書の目指す一つのわかり
やすい領域である。正義や愛に向けられた聖書的関心は包括的な原理を提供するものであり、
ルールを定める道徳法も、多くの例実も、そしてわれわれをふさわしい方向へ導いてくれる背
景にある信条ももちろん聖書によって形成されていく。責任的主体のモデルも、美德や悪徳に
ついてもまた同様である。すなわち人格形成は、聖書に一貫した道徳的関心なのである。

その場合、聖書には何が書かれていて、何を教えていているかということが問題である。そし
てまた、このことは聖書を一つの可能性として見ることである。すなわち、聖書は、良心に対
して鏡面であり、想像力を拓き立たせ、信仰・希望・愛へと導いていく。まさに聖書が聖霊の
はたらきとしての役目を基本的に指し示すものなのである。

最後に、聖書の与える影響力の幅広さについて触れることにしよう。あらゆる文脈のな
かで忘れられている一つのことは、聖書文学はわれわれの信仰と共同体の物語であることであ
る。聖書が歴史的叙述である以上、聖書の倫理的資料は歴史的文献である。それは、キリスト
教の物語の部分であり、われわれキリスト者の物語であり、伝統であり、神の民の共同体の物
語である。さらに、美德や道徳性を高めるため
に共同体は何をするのか、聖書を中心とする共
同体は信仰者の人生にどう関わっていくのか
等々。もっとも聖書がわれわれに指し示すのは
キリストであり、それは神の御霊ゆえにという
ことが前提ではあるが。

道徳教育における聖書の役割は、必然である
と同時に多岐にわたり、われわれが提起してき
たそれぞれの目的にも適合する。それでもまだ
聖書にまずく者は少なくない（聖書そのもの
がそう要求しているのだが）。そして、聖書が
われわれの心の中で確実に起こっている事柄を
描出するものである以上、それは道徳心理学的
手続きを避けて通ることはできない。倫理学に

21）このことは、マルコム・レイド（Malcolm
Reid）の未刊行論文“A Sketch of a Chris-
tian Ethic of Virtues, Character Develop-
ment and Moral Decision Making”に負う
ところが大きい。さらに、オドノヴァン(Ol-
iver O'Donovan)のResurrection and Moral
Order (Eerdmans, 1986)第10章も参照され
たい。また、ネルソン(Paul Nelson)のNarrative
and Morality: A Theological Inquiry
(Penn. State Univ. Press, 1987)は、ハワーワ
スが憂患する個人主義化や美德の倫理の十分
性に反論するものである。

22）Nicomachean Ethics II.1-III.5.
23）A Community of Character (Univ. of
24）On the Morals of the Catholic Church, in
Basic Writings of St. Augustine, vol. 1, ed.
Whitney J. Oates (New York: Random
House, 1948), pp. 319-360.
25）ジョージタウン大学創立200周年記念式典
において (America, August 5, 1959, pp. 54
〜60所収).
26）Paul Ramsey in The Roots of Ethics, ed.
Daniel Callahan and H. T. Engelhardt, Jr.
27）Lewis B. Smedes, Choices (Harper and
Row, 1986), chap. 4.
参考文献リスト
1. モラル教育


2. 聖書と倫理


